

識名園：琉球庭園

識名園は、数少ない現存する琉球庭園のひとつであり、その独特の設計、地形、植生から日本庭園文化において重要な地位を占めています。識名園は、1799年に首里城の南にある美しい田舎の村を見晴らす高原に王室の別荘として建てられました。この施設は、首里城から近く頻繁に訪れることができる場所にあり、王族や外国人の賓客の娯楽のための利用を目的としていました。琉球は、その歴史の大部分において、中国と日本との従属関係にありました。それぞれと関係には特定の外交上の要件があり、識名園は中国皇帝からの使節の受け入れを念頭に置いて設計されました。

この庭には、日本と中国両方の特徴が見られます。全体的な設計は伝統的な日本庭園の影響を受けています。遠くの風景が景観に組み込まれ、迂遠な歩道にはさまざまな季節の植物や自然環境を鑑賞するための眺めの良い地点が巧みに配置されています。しかし、いくつかの重要な要素は中国の様式に由来します。その結果、識名園は全体の構成を統合する見事な池を中心に設計された琉球独特の庭園となっています。多くの点において、識名園への訪問は、まるで琉球の縮図を体験しているようです。

識名園は1945年の沖縄の戦いの際に完全に破壊されました。1975年に20年間にわたる大規模な修復工事が始まり、1992年に琉球王国の最後の王尚泰（1843–1901）のひ孫、尚裕（1918–1997）が那覇市にこの庭園を寄贈しました。識名園は、2000年にユネスコの世界遺産に登録されました。